

おもいを託す

これまでとこれからと



現在の市街地▲



吉加江 隆さん
(舟ノ川)

戦前は国土交通省の測量士。終戦後、台湾から引き揚げ、農業を営まれました。

最近まで、趣味のしめ縄作りや娘さんとの文通などを楽しまれていました。今も電動カーで田んぼを見に行くなど家の周りを散策したり、新聞を読むのが日課だそうです。

伊佐市は誕生して8年を迎えました。

目まぐるしく変化する時代の中で、新たな「まちの未来」を市民の皆さんや伊佐市を応援してくださる皆さんと共に創っていく必要があります。

柔軟に、そして、たくましく生きて来られた「100歳の大先輩」に、これまでの経験や長寿の秘訣、これからの伊佐市の未来を担う若い世代へのメッセージを伺いました。

✳今年度、伊佐市では18人が100歳を迎えます。(大正5年4月2日～大正6年4月1日生)

皆さんが元気で仲良く無事に過ごし、まちが栄えて行けばと思います。

終戦後、台湾から引き揚げてきて、家もなく、知り合いもない状況で主人が亡くなりました。京都出身の私は“よそ者”で、子ども4人と姑を抱えてどうしようもありませんでした。幸いにも、教員免許を持っていたので教員として働くことができました。

戦争だけは絶対にしてはいけません。若い皆さんに当時の話を聞きに来て欲しいです。そして忘れないように後世に語り継いで欲しいです。



岩城 文子さん
(朝日町)

京都府出身。終戦後、台湾から引き揚げ、羽月小学校、大口東小学校の教員をして女手一つでお子さんを育てられました。

今でも元教え子が帰郷の際に会いに来たり、年賀状を送ってくれるのが楽しみだそうです。

皆が幸福に生活できれば、と思います。

子ども達には辛抱強くあってほしいです。途中でやめてしまっはいけません。最後までやり遂げることが大切です。

95歳までは何でもしていましたが、今は足が痛くなりました。畑の草取りやクワで耕すのはできるので、豆や野菜を育てたり、茶摘みをしてしています。

今でも炊事や洗濯など何でも自分でするのが元気の源になっていて、まだまだ死ぬ道がわからないです。



本田 キクノさん
(本町)

旧栗野町出身。午前5時半に起きて家事や畑仕事など何でもこなしながら、らっきょうや梅を漬けたり、趣味の和菓子作りを楽しんでいらっします。畑で収穫した小豆から作った羊羹は近所の方々から「美味しい」と好評とのこと。



■大正5年ってどんな年？

伊佐・・・行政区画は大口村、山野村、羽月村、西太良村、菱刈村、東太良村
大口街道を初めて車が走る

国・・・^{みちのみや}迪宮裕仁親王（後の昭和天皇）、正式に皇太子になる
夏目漱石死去

世界・・・第一次世界大戦中（大正3年～7年）

うどん1杯4銭、米10kg 1円9銭

大正時代の
東京の風景▶



農作業風景▼



昭和54年
の市街地▶



フルラン アデレさん
(明光学園)

イタリア出身。宣教のため中国、香港を経て昭和26年来日。福岡県大牟田市で明光学園の創立に携わり、60歳のときに大口明光学園のシスターとして来市されました。

大口明光学園では、創立以来続いているボランティア活動「一粒会」を立ち上げられました。

時代の変化とともに、生活や家族の形が変わってきました。子は親の姿を見て育ちます。現代の家庭では、親が家にいないことも増えてきています。「愛」は「家族」から始まり広がっていくものです。両親が共働きでも、愛情あふれる家庭の中で優しい気持ちを育てて欲しいです。愛があれば何でもできます。

今でも子どもの頃に親から言われていたことが心に残っています。「ご飯を残してはいけない、米粒一つ残してはいけない」と。だから今も残さずご飯を食べています。

「他人のご飯を食べなければ親の恩が分からない」と近所の家に2年間奉公にも出ました。

入植地の豊原では、初めは何も作れず2～3ヘクタールの山林を伐採して開拓し、畑や田んぼを作って農業で生計を立てました。電気や水道もなく、特に戦後は食べ物がなくて苦労しました。

若い皆さんは、一生懸命働くことが良いと思います。人と付き合うときには、優しく良い人であってください。



久野 ハルエさん
(敬寿園)

宮崎県出身。結婚し、約70年前に羽月北校区・豊原の開拓団に入植されました。

杖なしで歩く元気の秘訣は「若い頃から農業をしていたおかげ」とおっしゃいます。

■伊佐市の高齢者

(平成28年10月1日現在)

伊佐市の総人口 27,195人
75歳以上の人口 6,265人
総人口に占める割合 23.04%
100歳以上の人 34人
(男性：3人 女性：31人)
市最高齢者(女性) 109歳

